拙著『身も心もジャズ』℗2015 より抜粋
[当店との関わり]
■つい先日、ロイ・ヘインズさんのブルーノート東京での来日公演があり、何年かぶりにお会いすることができました。
　90歳を迎えられた彼はすっかり痩せてしまわれましたけど、私を見るとあの大きな目を輝かせて大変喜んですぐにハグしてくれました。さすがに動きは老人のものでしたが、一旦ドラムの前に座るとカクシャクとして、ツボを心得たところで気持よくバシッと入るシンバルが大喝采を受けていて、私は嬉しくなりました。私とお会いしてお話ししているあいだ中、ナッツを口に運んでいましたからきっとナッツは身体にいいのかもしれませんね。
　日本に行ったらボディ＆ソウルという店に行ってみろ、ということになった最初のミュージシャンがロイ・ヘインズさんでした。ウチが新宿百人町で産声を上げる少し前のこと。新宿厚生年金ホールで、ＮＹで活躍中のドラマーが来て「ドラム合戦」というコンサートが行われたことがありました。その時ライブハウス「タロー」をやってた私が、頼まれてステージで花束を渡す役を務めました。
　当時ロイさんのドラムは、大小たくさんのタムタムを並べる独特のセットでカッコよかった。その楽屋でお会いし素晴らしいドラミングだと褒めると、翌日、滞在中のホテルのカフェに誘われました。今思えば、若い私を口説くつもりのデートだったかもしれません。でも私は「追っかけ」ではなく純粋なジャズファン、そのテのことには全く興味がないことを彼もすぐに了解したのでしょう。その時はお茶を飲んでお話ししただけでした。
　２～３年経って、日本で最初のジャズ・フェスティバル、ライブ・アンダー・ザ・スカイが炎天下、調布の田園コロシアム（今はもうありません）で行われた時、ロイさんから招待状が来ました。そのコンサートを終えた後、開店から間もない百人町のお店に連れてきて夜遅くまでお客さまと一緒に楽しく飲んだのです。そんなことが始まりで、彼はその後六本木のお店にも来日すると必ずやってくるようになったのです。

私がこんなお婆さんになったいま、90歳になったロイさんとお会いしている。そうして彼のお孫さん（マーカス・ギルモア(ds) さん）も 今ＮＹで活躍し、時々ウチに来日出演する…その頃は夢にも思いませんでした。

[南仏でお会いした時]
■その欧州ツアーは、小曽根さんが計画されたメンバーのご家族の慰安旅行のようなもの。まずオーストリアのウィーンで公演した後、南仏プロバンスでの公演は有名なラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ音楽祭です。コンサート会場は、森の中の古いお城の広大な庭園。
小曽根さんの人気は欧州でも絶大で、以前にも出演されていたそうですが、この時はノーネームを率いての出演でした。フランス各地からやってきた大観衆は、その素晴らしい演奏に脚を踏み鳴らして大喝采でした。
アメリカから呼ばれたのは、チック・コリアバンドで、メンバーはチックさんの他、クリスチャン・マクブライド(b) さんロイ・ヘインズ(ds) さんケニー・ギャレット(as) さん。皆さん私とは古くからの知り合いで、滅多に行けない遠い地でお会いでき、私は格別の思いでした。ウィーンでもここでも、クラシック音楽の長い歴史が音楽や生活に息づいていて、絵画も含めて欧州の文化や伝統を肌で感じた、本当に素晴らしい体験でした。
長い間お店をやっても何も財産を残せませんが、こうした体験をはじめ、ミュージシャンたちと知り合ったり遊びに行った楽しい思い出が、今はとても貴重な私の財産です。私からジャズをとったら思い出が全部なくなってしまうほど、ジャズの中で生きている人生だと改めて思います。

[小曽根さんのアルバムにも…]
■先日「やっぱ小曽根さんて、いいッすねぇ」とお店のスタッフがＣＤを買ってきてお店のＢＧＭでかけていました。見るとジャケットには若き小曽根さんの少年のような顔写真。25年前の最初のスタンダード曲集「Spring Is Here」でした。サイドメンは ジョージ ・ ムラーツさんとロイ・ヘインズさん。